明治期から昭和初期における草津温泉の時間湯

関　戸　明　子

Jikan-Yu at Kusatsu Onsen between the Meiji era and the early Showa era

Akiko SEKIDO

群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編
第 69 巻　55―74 頁 2020 別刷

群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編　第69巻　55―74頁　2020

明治期から昭和初期における草津温泉の時間湯

群馬大学教育学部社会科教育講座　関戸明子

一　はじめに

草津温泉の時間湯は、独特の入浴法である。湯長の指揮の下で、湯をもむ、湯をかぶる、集団で三分間湯に浸かるという三つの要素を行う。

本稿は、草津温泉の時間湯という入浴法がどのように行われていたのか、その歴史的な経緯を諸資料によって跡づけることを目的としている。これまでの研究で取り上げられてよく知られている文献もあれば、新たに見出したものもある。これらを整理して資料紹介を行い、時間湯のあり方の推移を明らかにしたい。

時間湯の始まりについては、二つのエピソードで語られる（中村一九三六：三五―三八）。一八七五（明治八）年頃、講談師の桂円玉（燕玉）が熱の湯に入り、その合間に講談を聞かせて客を喜ばせた。そのうち誰彼となく彼を隊長と呼ぶようになった。彼は浴客が勝手に入れば湯が動き、熱さに耐えがたいから、共同に入浴して湯を動かさない案を提言し、それで話がまとまって、その音頭取りで入浴を行うようになった。一八七八（明治一一）年、野島小八郎が草津に来て入浴法を研究し、一八八〇年に諸客に推されて湯長となり、浴者を教導し、一八八八年には役場の指令により熱の湯の管理人となった。野島については、亡くなった一九一〇年に立てられた顕彰碑が草津の光泉寺境内にあり、碑文に来歴が記されている。

以下では、まず案内書などの記載内容について検討し、次に紀行文を取り上げて、時間湯を行う人びとの姿を捉える。そのうえで、年代別にどのような変化がみられたのかを明らかにする。紀行文からは、場所に関する作家のもつ主観的なイメージを見出すことができる。関戸（二〇一八a）では、いずれの著者も時間湯に言及しており、懸命に湯治する人びとの姿が草津を語るときに欠かせない要素であったことを指摘した。ただし、前稿は草津温泉という場所のイメージを捉えることを目的としたので、大槻文彦・坪谷水哉・大町桂月・若山牧水による時間湯の描写については省略した部分が多い。そこで本稿で改めて取り上げることとした。

なお、本稿で使用する史料には不適切な用語や表現があるが、歴史的文脈を尊重して原典のままとしている。また、書名や引用文で用いられている旧字

表1　換算表

華氏	摂氏
145	62.8
140	60.0
135	57.2
130	54.4
125	51.7
120	48.9
115	46.1
110	43.3

体は原則として新字体に改めており、一部で用字を変更し、句読点を加えている。また、湯の温度は華氏で示されているので、摂氏に換算した温度を参考として**表1**に掲げておく。

二　案内書にみる記述

表2は、草津温泉に関する案内書を調査し、時間湯に関する記述の有無をまとめたものである。これをみると、時間湯を詳しく取り上げた案内書は少ないことに気づく。とくに草津温泉の関係者による出版物で、その傾向が強いようにみえる。時間湯の説明がない案内書では、草津温泉における一般的な入浴法の説明や湯ただれ（糜爛）への対処方法が記されている。草津の湯は高温・強酸性であるため入浴を続けると糜爛ができる。その糜爛から病毒が外に出ることで、病が治癒すると信じられていた。

1　長井文靖『上毛草津鉱泉独案内』

一八八四年刊行の『上毛草津鉱泉独案内』には、十七の共同浴場が案内されており[1]、当時の状況が詳しく記されている。

次の文は、熱の湯に関する説明である（長井一八八四：一〇―一三）。その後に、鷲の湯と地蔵の湯の湯槽の数と入浴法は熱の湯とほぼ同じなので略すとあるので、三箇所で時間湯が行われていたことがわかる。

「揃て三分」「改正の二分」、「限つて一分」との号令から、時間の管理が始まっていることがわかる。本書がこの号令を記した初出の文献といえる。ただし、「時間湯」という言葉は用いられていない。

浴槽（ゆつぼ）四つあり。第一番を熱度（あつさ）最高とし、第二番、第三番、順次熱度を低減す。第四番は熱の新湯と称し、熱度低下のものにして、

表2　各種案内書における時間湯に関する記述

刊行年		書　名	著者・発行所などの書誌	＊	分量
明治13年	1880	草津温泉の古々路恵	編輯/出版人/折田佐吉（草津）	×	10丁
明治17年	1884	上毛草津鉱泉独案内	著者/出版人/長井文靖（横浜），蔵版/成美堂	○	48頁
明治21年	1888	草津温泉誌	著作/発行者/湯本平内（草津），印刷者/伊藤甲造（長野県上田町）	×	21丁
明治22年	1889	草津八勝	著作/発行/印刷人/阿部善吉（東京市）	■	12丁
明治25年	1892	上州草津温泉入浴略案内記	湯彦楼 大川角造（草津），印行/中野活版石版印刷所	×	12頁
明治28年	1895	上州草津温泉入浴略案内記	山本館 市川久三郎（草津），印行/中野印刷所	×	24頁
明治28年	1895	上州草津温泉入浴略案内記	発行者/富永徳次郎（草津），印刷所/中野印刷所（長野県中野町）	×	24頁
明治29年	1896	改正新版草津温泉案内	松野屋〆蔵（草津）	×	28頁
明治　年	-1896	上州草津温泉場名所案内	著作/発行/印刷人/阿部善吉（東京市）	■	9丁
明治32年	1899	上州草津温泉入浴略案内記	日新館 湯本柳三郎（草津），印行/中野印刷所	×	24頁
明治38年	1905	上州草津温泉入浴略案内記	編輯/発行者/山田治衛門（東京市），印刷者/山田市太郎（東京市）	×	13頁
明治38年	1905	上州草津温泉誌	著作/発行者/松永彦右衛門（東京市），印刷所/博文館印刷所（東京市）	△	44頁
明治40年	1907	草津鉱泉療法	著述/発行者/下屋学（草津），印刷所/秀英舎第一工場（東京市）	×	64頁
明治41年	1908	草津温泉	著作/発行者/萩原太一郎（群馬県長野原町），発行所/草津鉱泉取締所	◇	149頁
大正３年	1914	草津温泉名勝写真帖	著作/発行者/戸丸国三郎（東京市），発行所/日本温泉協会代理部	△	15頁
大正10年	1921	草津案内	著作/発行者/戸丸国三郎（東京市），発行所/日本温泉協会代理部	◇	47頁
大正10年	1921	草津温泉案内　4版	著作者/石田謙吉（草津），発行所/草津鉱泉取締所	×	66頁
大正11年	1922	風光明美草津温泉誌	著作者/五十嵐治夫（東京市），発行所/東京鉄道タイムス社	○	174頁
大正12年	1923	草津温泉案内	著作/発行者/布施廣雄（草津），発行所/草津鉱泉取締所	△	91頁
昭和12年	1937	くさ津	著作/発行者/布施廣雄（草津），発行所/草津温泉組合	△	113頁
昭和13年	1938	天下の草津温泉	著作/発行/中村舜二（東京市），発行所/大東京社（東京市）	○	206頁

＊時間湯に関する記述：○数頁の説明，■図絵，◇記事の引用，△数行の説明，×記載なし

浴客何時にても随意に入浴する得れども、第三番以上は入浴するに法あり。隊長（隊長又は湯長と称し、浴客中、熱度最高の湯、即ち第一番浴槽中に入浴し、且湯の熱度を加減する巧者なるものを之に充つ）なるものありて、入浴の時刻至れば喇叭を吹き浴客を招集し、鉱泉注入の口を塞ぎ、木板を以て交番浴槽中の湯を攪乱せしむること数分時、土俗、之を湯を揉むと云ふ。湯を揉むは熱度の低減せしむるなり。然して隊長、浴槽毎に柄杓を以て湯を酌み、頭を濡し、次に脚を没し、湯の熱度を試み、適度（適度は隊長の加減に任し、且験温器なきを以て分明ならざれど第一番は百三四十度の間にあらんか）に至りて湯を揉むことを止め、浴槽の上ごとに凡二尺を隔つて、幅尺余の木板を併列す。併列し了るや、隊長、浴客、各自入浴せんとする浴槽木板の上に座を占め、柄杓を以て湯を酌み、頭を濡し面部に及ぶ。頭を濡すは、人々の適宜に任すと雖も大抵百杯或は二三百杯までとす。頭を濡すは、土俗、湯を冠ると云い、湯を冠ること多ければ逆上せずして上部の病毒を下部に下らしむと。隊長時を量り柄杓を伏せ木板を叩けば、各人、湯を冠ることを止め入浴の結束をなす。此結束中、入浴するものもあり。是は定時間、即ち三分時、入浴に耐へざる人にて牛蒡と称す。結束とは足袋を穿ち、木綿を以て脛股腹を巻き、腰肩両手を掩ふ。各人の結束了るや、隊長「下りませう」の令を下す。此に於て各人一斉入浴、沉黙静然、此時、隊長号令（以下隊長とのみ記す（略））「揃て三分」、浴客応諾、一分時を過て、隊長「限つて一分」、次に「ちつくり御辛抱」、浴客応諾、又隊長「最直です」、浴客応答「ありがたい」、隊長「三番如何です」、三番浴槽浴客応答「き〻ました」、隊長「二番」、二番浴槽浴客応答「き〻ました」、隊長「一番」、一番浴槽浴客応答「き〻ました」、最後に隊長告て曰く、御上りなさる時、御静に願ひます。浴客応諾、出湯の用意をなし、隊長の「さあき〻ましたらそろ〳〵上りましよう」の令を聞や、一斉飛出で直ちに各部の結束を脱し全身を拭ふ。陰具等の糜爛したるものは、急に手帕を湯池の下流なる熱湯に浸し、軽く之を絞り、交番陰具其他の部分を掩ふこと数回、之を掩ふ時は疼痛甚しけれども、暫時にして爽快なり（略）

第三番以上入浴の数は、日の長短に随ひ一日六回、或は四五回にして時々変更す。然して毎回の最初に入浴するを一本目と称す（略）。一本目の次に入浴するを二本目、二本目の次に入浴するを三本目と唱へ、一本目は二本目より熱く、二本目は三本目より熱し。故に人々入浴し得べきの熱度に応じて（略）入浴すべし。但し湯を頭に全く冠ること二三十杯以上に至り得るの湯は、入浴して三分時間は必ず耐へ得べきものとす

2 「時間湯」という用語

一八八七（明治二〇）年に草津温泉改良会が設立され、草津温泉改良議案がまとめられた。その第三条に「熱之湯鷲之湯地蔵之湯等之如ク、時間湯之入湯可致客ニシテ（略）」という一文があり（山村一九九二：一一七）、このことから当時「時間湯」という言葉が用いられていたことがわかる。

表2では、二冊に「図絵」と示している。いずれも阿部善吉の案内書で、『草津八勝』には、熱の湯・鷲の湯・地蔵の湯の三つの共同浴場の図絵で、湯もみを行っている場面を描いている。しかし、具体的な説明や時間湯という言葉はみえない。

時間湯を描いた図絵は『上州草津温泉場名所案内』に掲載されている。**図1**をみると、「時間湯一」は湯もみ、「同断二」はかぶり湯、「同断三」は入浴中を描いていることがわかる。左下は瀧の湯の打たせ湯である。

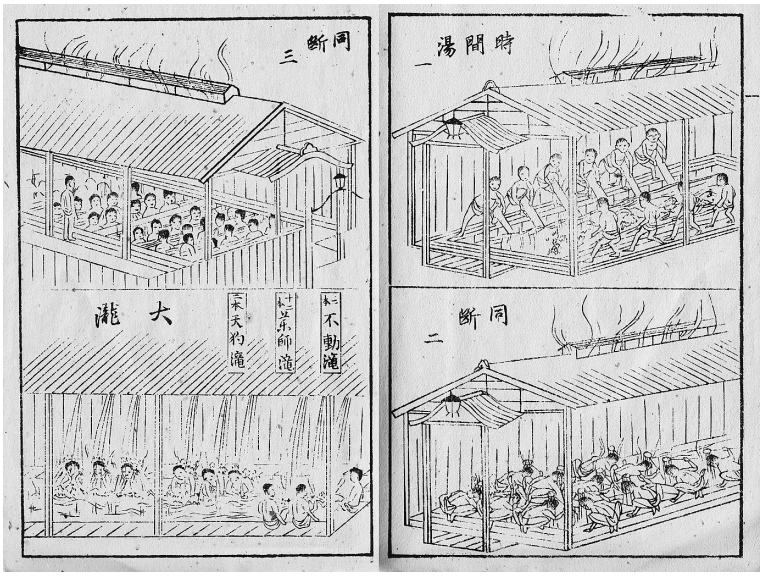

図1　時間湯の図絵（明治中期）
（出典：阿部善吉『上州草津温泉場名所』）
（群馬大学総合メディアセンター図書館所蔵）

本書の奥付には「明治　年七月■日印刷出版、東京市神田区■■■■番地　著作兼発行印刷人　阿部善吉」とあり、刊行年が空白となっている。阿部善吉は多くの鳥瞰図の著作や発行に関わっている。一八九一年の一点には阿部の住所の記載がないが、一八八八（明治二一）年から一八九六年までの六点は東京神田区、一八九七（明治三〇）年と一九〇三年の二点は草津となっている（関戸二〇一二）。このことから本書の刊行は、阿部が草津に住所を移す前の一八九六年以前と考えられる。

松永彦右衛門『上州草津温泉誌』には、草津温泉の入浴規定に一七項目を挙げているが、その一つに次のようにある（松永一九〇五：三一）。

七　糜爛発生に至れば時間湯（白旗湯、松湯、鶴湯、地蔵湯、熱湯）に入浴すべし。是れ規則厳正にして常に一定の温度を保ち、多年経験ある湯長（俗に隊長と云）の監督あるを以てなり。尤も内湯にて入浴を終了するも亦不可なし

これによれば、五箇所の共同浴場で時間湯が行われていることがわかる。しかし、この他の項目にも内容に関する詳しい説明はない。

3　熊田葦城「草津の時間湯」

表2に「記事の引用」と示した二冊には、報知新聞社の主幹・熊田葦城が一九〇七年に執筆した記事「草津の時間湯」が掲載されている。萩原太一郎『草津温泉』は、一九一一年から一九二六年のあいだに五回にわたって改訂増補された。第六版の序には、草津関係の文書の出版物を験せば大部分この冊子から適取しており、合算すれば実に何十版百万部近い出版物となったであろうと述べている（萩原一九二六）。本書は長く流通し、熊田の記事もよく知られるものとなったといえる。

記事には時間湯を行っている人びとの描写もあるが、これについては次章の紀行文にみる記述に譲りたい。時間湯は六箇所にあり、その号令や調子は同じ、隊長の野島は脈所に湯を垂らして温度を測り、一度以上を誤ることがないという（萩原一九〇八：二一-二八）。

◎草津温泉の入浴法は勇壮なり、沈痛なり、他の温泉に於て見るべからざる一種の奇観なり（略）
◎時間湯は毎日四回（午前六時、十一時、午後二時、五時）毎回三分、時刻を限りて入浴するが故に此名あるなり
◎時間湯には隊長なるものありて指揮し、号令す。規律厳正にし

て宛然たる軍隊的行動なり。時間湯は古来浴客の自治に任せ、事に慣れたるもの代わる〳〵号令す。明治の初年、桂燕玉なるもの専ら音頭を取る。燕玉は講談師なり。衆先生とも呼ばれず、旦那とも言はれず、唯隊長々々と呼び做せるもの終にその名称となり、今や軍隊的行動に相応(ふさ)はしき称呼となれるも亦奇ならずや

◎隊長の命令は何人と雖も服従せざるべからず（略）

◎時間湯は六ヶ所にこそ分るれ、其号令も一、総ての調子も亦一なり、故に茲には唯単に熱の湯の光景のみを記さんとす

◎熱の湯には三槽あり。第一槽最も熱くして百四十五度、第二槽之に亜ぎて百四十度、第三槽は熱度稍々低しと雖も尚ほ百三十五度たり。衆板を以て攪拌すること約三十分、熱冷めて百二十度乃至二十二度となり、湯も亦和らぐ。之を湯揉みといふ。梅毒患者の如き最も運動の効あり。浴客の熱きを好ものは第一槽に浴し、次は第二槽、其次は第三槽に浴す。見渡せば第三槽に集まるもの最も多し

◎人員の多寡に依り数回に分ちて入浴す。一回目を一本と曰ひ、二回目を二本と曰ふ。一本の時最も熱く、次第に熱度低減して四五本目には百十度となる。熱きを好むものは一本に浴し、婦人は皆最後に浴す

◎入浴の法は皆一斉に入り、一斉に出て、遅速あるを許さず。中途にして或は出で、或は身体手足を動かさんか、熱湯波瀾を起して同槽者の膚を侵す。苦言ふ可からず

◎別に二槽あり。温度低くして内湯と異ならず。内湯無き旅館に在るもの来りて此槽に浴す（略）

◎熱の湯の隊長は野島小八郎と曰ふ越後の人、職に在ること三十余年、最も老練を以て称せらる。湯を手に掬し、滴々として脈所に垂らし、以て熱度を図る。寒暖計を以て之を試むるに曾て一度以上を誤ることなしと云ふ（略）

図2　時間湯の写真（大正3/1914年）

（出典：戸丸国三郎『草津温泉名勝写真帖』（筆者蔵））

4　戸丸国三郎『草津温泉名勝写真帖』

時間湯は草津の名物として、絵はがきや写真帖に、その画像が用いられるようになった。一九一四年の『草津温泉名勝写真帖』は、一三組の写真を掲載している。その一枚で、時間湯の著名なるものとして、熱の湯、鷲の湯、地蔵の湯、松の湯、白旗の湯の五つの共同浴場の外観を組写真にしている。時間湯の内部は、**図2**に示したように三ページにわたって取り上げている。三枚目の写真で、入浴を待って周

りに立つ人びとの足元をみると、大半が足袋をはいていることが確認できる。

写真に付された解説は簡略なもので、次のとおりである。

時間湯ノ内部（一）

一日四回（又ハ五回）一定ノ入浴時アリ、時至レバ各湯長、号音ヲ以ツテ報ジ、浴客舎ニ集ル、浴ニ先チ湯長ノ号令ニ従ヒテ、各自板ヲ取リ、一斉ニ拍子ヲ合セテ槽中ヲ攪拌ス、コレ温泉ノ熱度ヲ減ゼンガ為ニシテ、亦適好ノ運動タリ、其状極メテ爽快

時間湯ノ内部（二）

攪拌ヲ終レバ浴客皆槽畔ニ蹲リ、柄杓ヲ以ツテ湯ヲ頭ニ灌注スルコト百回乃至二百回也、之レ逆上ヲ防ガンガ為ニシテ、因ツテ頭脳清爽タリ

時間湯ノ内部（三）

灌注終レバ湯長入浴ヲ令シ、客初メテ槽ニ入ル、入浴時間ヲ三分ト限定シ、進退一ツニ湯長ノ号令ニヨル、湯長時々、時針ノ進行ヲ報ズレバ、浴客一斉ニ大声応ト答フ、総ベテ他ニ類ヲ見ザル所也、槽辺ニ佇ムハ第一回ノ浴了ヲ待ツ者ニシテ、第一回ヲ一本目ト称シ、二本目三本目ヨリ五本目ニ及ブ事アリ、熱度従ツテ減ズ

5　五十嵐治夫『風光明美草津温泉誌』

著者の五十嵐治夫は、かつて病弱であり、草津温泉が唯一の治療地、十数年夏に冬に草津の気分を味わった、時代の変遷とともに理想的温泉場となった草津を紹介する案内書が必要であり、日頃の恩恵に報いるために筆を取ったと、序に記している。一九二二年刊行の本書には、時間湯は六箇所で行われており、かぶり湯の回数が減って、現今は二十杯から五十杯位を通常とするとある（五十嵐一九二二：八〇–八四）。

草津温泉の入浴法には他の温泉で見ることの出来ない時間湯と称するものが行なはれて居る。（略）屋外に共同の浴場が六ヶ所、即ち松の湯、熱の湯、白旗の湯、鷲の湯、千代の湯、地蔵の湯、とあつて毎日夏は五回（午前五時、十時、午後二時、五時、八時）の時刻を限りて入浴する方法である。午前五時十分前、第一回の入浴を知らす喇叭の声が朝の温泉場に響き渡る。（略）

先づ脱衣場に着物を捨て各々襦袢腰巻の姿となる。足袋は必ず突掛けることに定めてある。それは爪先は全身中に最も熱さを感ずるからである。

浴槽（ママ）は普通二つありて、第一槽は最も熱く百四十五度前後、第二槽は百四十度前後、第三槽は百三十五度前後で、婦人の方や子供連は第三槽に入るを常として居る。

それから湯揉といふものを仕る。腰巻一本になると、各自選んだ浴槽に集り、皆板子を持つて熱泉を攪き回す。湯を冷ます為と和らぐ為と同時に、浴客及び梅毒病患者に対して最も必要なる強い湯気を自然に呼吸さす様になつて居る。また運動の効も少なくない。

この浴槽を攪き回すにも一種の音調がある。板子の左右に一攪一揚自ら節を成してゴツトン〳〵宛然漕の軋る様な音になる。その調子によつて浴客は

『ハア、チイナ〳〵ハアチヨコチヨイナ』とか

『ヨーホイ、ハアドツコイ〳〵』などゝ宜に節面白く相唱へて調子を合せる、疲れたものは他の者が之に代わる、そして熱泉の度を各漕二十度以上減冷する。

時間湯は古来から浴客の自治に任せて、事に慣れたものを湯長として、入浴者一切の行動を湯長の指揮、号令に委せて居る。

第一漕の温度百二十度前後に下りし時に湯長は号令をかける。板子持つ手は一斉に停めて、手早く襦袢を脱ぎ赤裸となつて浴槽

近く陣取る。各自小檜杓を把上げて湯を頭上に被け初まる。それが昔は百杯二百杯と被るを常とせしが、医学上又浴客統計上害ある為め、現今は二十杯乃至五十杯位を通常として居る。逆上、瞑眩を防ぐに最も効能が有ると云ふ。

湯長時分を見て

『宜しくばそろ〳〵下りませう。』

と云へば、皆な檜杓を捨てゝそろ〳〵這入る。熱冷めしたとはいひ、尚沸騰点に近いのであるから始めての人は躊躇して仲々足も入れることが出来ない。病ひ持つ人の信念で無くば腰さい没することが出来ないだらう。

やがて皆な沈まつたを見て湯長が

（揃つて三分――）

『辛棒の仕どころ』

などゝ始終声をかける。人々は歯を咬ひしばつて息を殺す

（略）

（限て一分）

『宜しくば上りませう』

と湯長の声が終らぬうち一斉に脱兎の様に飛び上る。

6　中村舜二『天下の草津温泉』

著者の中村舜二は、本書の成り立ちについて、草津での滞在六十余日、後半の三十日間に材料を集めて執筆したと序で述べている。一九三六年夏の現地調査によって作成された案内書である。医学者で温泉研究者の藤浪剛一と三沢敬義が序文を寄せ、資料を提供している。自身と草津との関わりについては、一九二六・二七年頃に電力事業の視察で一泊、一九二九・三〇年頃に一ヶ月滞在した妻を迎えに行った、一九三三年に家族一〇人余で一〇日間余滞在と三回あり、この時が四回目であった（中村一九三六：一一五–一一六）

本書では「町営の公衆浴場、時間湯と入浴回数、湯揉みと湯長、時間湯と湯揉みの始まり、三分間の辛抱」という項目を立て、浴場や入浴法を詳しく案内している（中村一九三六：二六―二九）。号令はかぶり湯の合図を除くと、入浴に関するもの七つを記しており、現今まで伝えられてきた号令とほとんど同じである（ＮＰＯ法人草津湯治の会二〇一四：巻頭二一）。

現在（昭和十一年九月）草津町営の公衆浴場は、左記の如き十四ヶ所であつて、其内の五ヶ所が時間湯に充てられ、他の九ヶ所が普通湯となつて居る。時間湯は夏期特に多い湯治客を対象として居るので、普通湯に比して収容力も大きく設備も少しく整つて居る。（略）

熱の湯　松の湯　地蔵の湯　鷲の湯　千代の湯

この五ヶ所の時間湯は、何れも源泉の沸騰地点若しくは直ぐその附近に建てられて居るので、所謂沸き立てのホヤ〳〵と云ふよりも、沸騰そのものであり源泉それ自身であつて、同時に又た新鮮そのものであり自然そのものでもある。（略）

この時間湯の浴槽は、大体二区画又は三区画に仕切つて、源泉の導き方によつて一番湯、二番湯、三番湯と云つた工合に、温度を少しづゝ引き下げられて居る。一番湯は先づ百二十度程度で、二番湯、三番湯と二度乃至三度程度に熱度が緩和されて居る。入浴者は普通三番湯から入りはじめて、慣れるに従ひ、又タゞレに順応して二番湯、一番湯となるのであるが、三番湯が一番多く利用されるので、随つてどこの時間湯でもこの三番湯（三番の無いところは二番）が浴槽の大部分を占めて居る。[2]

そこで問題は入浴の回数と入浴時間である。昔は一日五回の習はしであつたものだが、近年になつて一回減らされて四回制度となり、午前が七時と十一時、午後が三時と七時の各両度で、湯揉

み作業（別項参照）で熱い湯を洗練し、熱度を引き下げた上で銘々用意の柄杓（凡そ一立）で、『冠ぶり湯』と称して、先づその湯をザブ〳〵と頭にかぶること三十杯と定められて居る。つまりこの冠ぶり湯で大切な頭に活を入れ、逆上や眩暈の予防に備へるのである。昔はこの冠ぶり湯を百回も二百回も重ねたものだが、現在ではこの程度が合理的だとされて居る。この冠ぶり湯が済んで、愈々湯長指揮の下に一同ザブンとでは無く、ソロツと湯に入り、別項に記した如くに三分間の修練を積むのである。（略）草津を天下に宣伝したのが有名な『草津よいとこ』の湯揉み歌で説明された『湯揉み』であり、その湯揉みを中心とした入浴工作統率者たる湯長の存在である。（略）

午前の第一回の湯揉みは、その日の最初であり湯が前夜から代へられて居る為に、約一時間許りを揉むに揉むのを常とし、第二回、第三回、第四回はどこの時間湯でも大概三四十分程度となつて居る。浴槽一回の収容人員は熱の湯が最も広くて先づ四十人、松の湯、鷲の湯、千代の湯、地蔵の湯では二三十人前後で、男子が先づ這入つて女子が後回しとなつて居る。

浴槽の四周に『わいせつの歌は御遠慮下さい』と大きく張り出されては居るが、こゝは苟くも草津時間湯の闘士の揃ひである。（略）随分露骨なのを代る〳〵高唱絶叫して、御湯の熱気と共にあたりに発散させるその光景は、（略）イヤハヤ壮んなものではある。（略）

湯長は大時計と睨めつこをしながら、一尺に余る筒入りの大い寒暖計を湯に突つ込んでは、時々その熱度を検査して居る。やがて人も練られ湯も亦た練られた潮合を見た湯長は、拍子木をカチ〳〵と叩いて入湯の用意を命ずる。（略）柄杓にお湯を満々と汲んで、頭から三十杯を冠ぶるのがこゝでの特色、それが済んで愈々湯長の号令で、皆一緒にソロツと這入るのである。（略）三分間が刻々と刻まれて行く間に、湯長は時計の針を見詰めては、何事か次ぎ〳〵と号令を掛けると、この湯長の掛け声に応じて浴客は一々お湯の中から、それに合ひ槌を打つことになつて居る。この湯長の号令はどこの時間湯でも共通だが（略）我れ〳〵素人の耳には一向聞き取れないが、湯長の説明に従へば次のやうな八度の号令に分れて居る。

一、『御支度はよろしう御座いますか。…一同冠ぶり湯を行ふ
二、『よろしくば下りませう。……一同入湯
三、『揃つて三分。……同一行動を命ずるの意
四、『改正の二分。……一分を過ぎた時
五、『限つて一分。……二分を過ぎた時
六、『チツクリの御辛抱。……あと僅かになつた時
七、『辛抱のしどころ。……激励するの意味
八、『よろしくば上りませう。……時間満了の時

三　紀行文にみる記述

1　石坂白亥「白根紀行」

石坂白亥は一八二七年に上野国で生まれた俳人で、一八六九（明治二）年に草津へ赴いている。水戸藩士・武田金次郎[3]の供の一人として、六月二〇日に小石川の水戸藩邸を出て、二四日に草津到着、翌日から山本十右衛門（のち十一郎に改名）の隠居宅に滞在し、七月二一日に草津を立った。この年の四月七日に草津で大火があり、逗留する家もみえず、大屋もいまだ普請を始めていないものが多いとある。

入浴の様子は七月九日の記事に詳しい（石坂一九八〇：七六–七七）。次の文からは、練兵の指揮をまねて「総隊あがれ」という指図をする者がいたことがわかる。浴場名は、この日には記されていないが、他の日に言及されている熱の湯と思われる。七月一二日から一四

日には、爛れのつらさに入浴を避けて、地蔵の湯を引き、板を囲い屋根を張ってあるという蒸し湯に出かけている。

九日　雨　股の爛れんとする勢にて頭痛発熱悪寒し、浴するに難儀也。扨数多の人の咄しを聞くに、いづれも早く爛れん事を願ひ、爛れて後は乾かむ事をおもふといへども、其の毒の浅深によりて愈るに遅速あり、其中のくるしみをいはば患所必痒みを生ず。故に数度湯に入、夫さへぬるきはあがりて湯の乾く間、緑礬の気しみ渡りて脳に徹し、しばしはものも得いはれぬ程なれば、みな熱湯に入る。白布に腹にまき、足袋脚絆をはき、手の甲と云ものをかけ、首には手ぬぐひを巻き、一同湯桁の上に並び居て申合せ、湯を動かさざるやうに沈み、あがるにも又左の通り。然るに剽逸のものありて、練兵の指揮をまね、総隊あがれといふを指図にみな湯桁に登る。手ばやくからだを拭て着ものをかけ、側の茶みせにて休み居ては浴する也。あつさをこらへて沈むが為に、手足みな火がたと云物のごとく焼て見ぐるしかりき。

2　大槻文彦「上毛温泉遊記」

国語学者の大槻文彦（一八四七～一九二八）は、一八七九（明治一二）年に博物学者の田中芳男とともに草津を訪れた。九月七日夜一一時に草津到着し、山本十一郎の宿に泊まった。八日は草津滞在、九日早朝に出立している。

打たせ湯となっていた瀧の湯以外は、世の常の入浴と異ならない、ただ熱の湯には浴法があるとしているので、時間湯が行われていたのは熱の湯だけだったと推察される。**図3**は、同時期の熱の湯を描いており、湯もみの場面が中心となっている。

一日の滞在ながら大槻は詳細な記録を残している。熱の湯に入浴する者は死ぬか癒えるかを掛けており死者もあることに驚き、野蛮残酷とあきれている。隊長と呼ばれる者は今年より人を選んで世話人と称していること、入浴時間が二～三分間ばかりとなっていて、まだ三分と定まっていないこと、隊長のかけ声にみなが唱和していることなどがわかる。

諸泉の中に瀧の湯には浴法ありて濫浴すべからず、其他の浴場は世の常の温泉に浴すると大に異なるなし。只熱の湯は特に浴法ありて、其の状実に人をして胆を寒からしむ。（略）其の浴するの熱度は華氏百二十五度なり、（略）此の湯は殊に梅毒に効ありとし、浴する者は大抵経久痼疾に陥りし者にて、皆此熱湯に病を投ずるは死ぬると癒ゆるとの両途なりと決心し、実に此の熱に死ぬる者往々ありといへり。近年県庁よりも種々其の弊を諭され、此の浴場の旁に警察の交番所などもあれど、愚民更に従はず、此の熱ならでは効なしとし、此の湯に入りて死ぬるは即不治の病なるものとし、甘んじて此の危厄を踏めり。（略）此の熱の湯は市街の中央湯垣の西北路旁にあり。涌口の傍に浴場を作る。湯槽方三四間、中を三槽に分ち、極めて熱きは涌口にして次第に稍ぬるし。（略）浴する時は数十人揃ひて入る。浴者の中に久しく浴治して熱に慣れたる者、頭目となる。卒無頼の者なり、衆人これを隊長と呼べり。隊長の合図にて入り又出づるなり。浴者、隊長に賂送

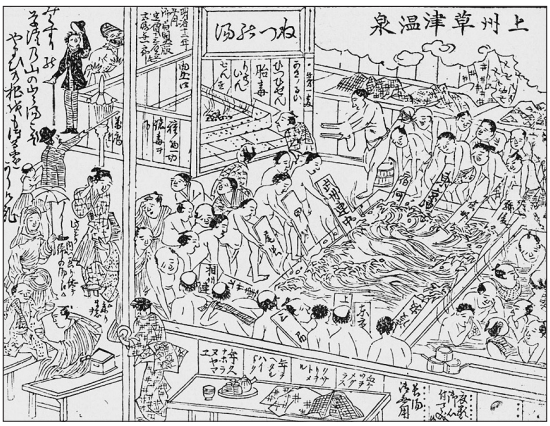

図3　熱の湯の図絵（明治12/1879年）
（出典：西川義方（1932）『温泉と健康』（筆者蔵））

る。然せざる時は種々に妨げ或は熱に苦ましむる事あり。隊長は夏の初来り秋の中に財を蓄へて帰る者もありと云。然るに今年よりは其の弊を改め、更に人を選びて世話人と称せしむとぞ。初めて此に来る者は先、他の温湯に入り慣れて、次第に此熱湯に移るなり。此の湯、夜は新泉終夜流れて朝には新陳交替す。早朝浴場を開かんとする時、隊長先出でて湯の差口を塞ぎ柝を撃ちて人を呼べば、市中遠近の旅店より浴者皆来り集る。其体を見るに身の内皆爛れて陰部殊に甚しく、皆綿などあてあり（略）皆よろ〳〵と歩む。男女裸体となり打交り騒がしく入り立つ。初め各一枚の板をとり湯槽の四辺に立ち、声立てて湯をかきまぜて熱を殺ぐ。これを湯を揉むといひ、板を揉板といふ。揉む事凡十分間許にして隊長掌を鳴らして止むれば、長き板を数枚槽の上に亘し皆板の上に蹲まり、柄の短き柄杓にて皆俯して頭部に熱湯を汲み上げ〳〵注ぐ。初めに斯くして後に入らざれば、体のみ熱して眩迷すと云。頭に注ぐ事凡三百盃程なるべし、皆頭も面も真赤になりて煠であげたるが如し。隊長又柄杓にて槽の舷を叩けば皆湯に入るの装を為す。弱き者、新参の者は足袋をはき、又は肩身に布など纏ひ皆揃ひて、板に両手を突き張り足よりそろ〳〵と入るなり。入る時に隊長声をあげて「三国一の名湯――」といへば、皆異口同音に「有り難い」と和す。隊長を首として――隊長は湯の差し口の処に入る――一同身動きもせずして沈む。（略）全く沈めば隊長時々に声を揚げて種々にたはけたる事を云ふ「梅毒は根切れだもう少しの辛抱だ」などいへば一同声あげて和す。熱にまけじと気を引き立つるならん。沈み居る間は凡二三分間許にして隊長、「暖つたらそろ〳〵出やう」――余は煠つたらの誤りなるべしと思へり――といふを合図に一同我先にと跳ね出づ。其熱き事如何ぞやと思ふばかりなり。余が見たる時は、此一度に入りたる者、凡五六十人許なり。（略）盛なる時は此浴場の四辺に三百人も集ると云。最初に入るを一番と云、次なるを二番、三番と云。二番の群よりは湯を揉まず直に頭に注ぎ入るなり。四番程にして止ぬ。婦人は多く二番三番に入る。（略）斯くすること一日に五六度なりと云。（略）熱湯に沈む間に堪へず、又一人先出づる事能はずして遂に眩して斃るる者あり。斃るれば「アガツタ」といひ一同に板の間の上へ引き上げ、水注ぐ。蘇する者は蘇し、体弱き者は遂に死ぬるもあり。実に此の熱の湯の現状を見て、余、田中君と且驚き且呆れ醜臭野蛮残酷、亦これに超ゆるもの無かるべし。

3　坪谷水哉「草津入浴記」

坪谷水哉（一八六二～一九四九）の「草津入浴記」は一九〇六（明治三九）年八月、草津に一週間ほど滞在したときの見聞をまとめたものである。ここでは、時間湯という名称が用いられており、湯畑を囲む位置にある熱の湯、松の湯、白旗の湯の三カ所と、少し離れた鷲の湯（本文では鷹ノ湯と誤記）と地蔵の湯で、一日五回入浴していると記している。

次の文からは、浴場ごとに入浴客に知らせる鳴り物が違うこと、糜爛で歩行困難な客が集まってくる様子、隊長の号令は正面の時計の下で行われていることなどがわかる。

忽ち聞く午前五時の時間湯を報ずる種々の鳴り物の中に、喇叭は熱の湯、鈴は松の湯、拍子木は白旗の湯なり。近く湯畑を囲んで鼎の如くに位置を占めたる浴場は、各各鳴物で浴客を招集すると、家々の客室から、浴衣の白きがゾロ〳〵と、左手に手拭またはタオル、右に柄杓を携へ、まだ昨今到着したるは元気好けれど、十日乃至二週間も経たるは、股間、腋下など、激しく糜爛れて、歩行自由ならねば、股を広げて家鴨の行列の如く、各自に平生入浴する浴場にと来り集まる。最も多き熱の湯は、同時に三百人ほども集まり、他の松の湯も大抵之に匹敵し、白旗の湯は百人位に過ぎず。浴場に

集まりたる浴客中、身体の激しく糜爛れたる者は、滞在の久しきだけ知己も多く、他の人々之を劬はりて、暫らく傍に眺め居れど、自余の者は、浴衣脱ぎ捨て、各各に、浴槽の傍に備へたる幅七寸、長さ六尺許りの板押つ取り、片端を湯中に入れ、一列に並んで、ハア、コリヤコリヤ、ドツコイドツコイと懸け声勇ましく、調子を揃へて湯中を攪拌す。（略）斯かる作業の総指揮者には、何れの時間湯にも、湯長、俗に隊長と名くる者あり。（略）隊長は、数〻柄杓を以て湯を自身の頭に注ぎて熱度を試験し、大約三十分時間を攪拌したる後、最早入浴に適すると認めたるとき、手を拍て攪拌を制止む。此時の熱度は大抵百二十度、隊長の頭は一種の寒暖計にて、柄杓で冠り検して、一度でも其の熱の加減を誤まることが無い。

今まで湯の中を攪拌はす用に供した板は、急に浴槽の両端に橋の如く列ねて架け、板と板との間は二尺ほどづゝを隔て、浴客は其の板の上に行儀よく並び座し、タオルまたは手拭を蔽ふたる頭を低く板の間に垂れ、直径三寸、深さ三寸、柄の長さ五寸ほどなる柄杓を以て、槽中の湯を汲んで頭に注ぐこと大抵百回乃至二百回、是で先づ熱湯中に入るも逆上して瞑眩する危険を予防し、斯くして一同の準備が出来ると、隊長は正面なる時計の下に立ち、号令して曰く、

『御準備が宜しければソロ〳〵下りませう』

『揃つて三分――』之れが一同浴槽中に身を沈めたるとき、先づ隊長が下したる号令である。（略）一生懸命と為て両手を左右の板に懸け、戦々兢々として身を下して脚を槽底に着けたるとき、是から三分間は、決して自由の行動を許されざる命令に接したるなり。勿論一人にても身を動かして湯を煽れば、他の者は熱に襲はれて堪へ難くなるなり。（略）一槽の中、一回約五六十人の浴客、大官、紳商、車夫、馬丁、貴賤平等、上下無差別、尽く隊長の号令に服従して、唯だ其の顔を板の上に現はし、一号令ごとに、『オーイ』と一斉に叫んで、之に和するのみ。頓て一分間経てり。

『改正の二分――』之が隊長の第二の号令なり。（略）暫らくして『限つて一分――』と号令す。さア其頃になると、浴客は皆な顔色が火の如く赤くなり、口を開いてホー〳〵と大息するものあれば、歯を食ひしばつて気を張り詰めるもあり、一呼一吸、気息次第に困しむ。隊長ジツと見詰めて之を慰さめ、『ハアチツクリ御辛抱！』、浴客の顔色は益〻赤く、呼吸は愈〻荒くなり、最早堪へ難きが如し。然れども一人軽忽に動かば立どころに一同の激怒に触れ、如何なる制裁を受んも知れねば、今は絶体絶命と覚悟して、次なる号令を待てば『ハア辛抱の仕どこだツ』と叫んで未だ上槽を許さず。最早眼も眩むばかりとなる一刹那、『サア、そろ〳〵上りませう』と叫ぶ頃には、既に号令が何と云ひしか耳にも留まらず、一斉に両手を左右の板に懸け、ザブリツと音させるや否や、湯出蛸の如く赤くなりたる老幼一同の身体は、忽ち皆な板の上に在る。

熱湯に茹でられは、疲れ切たる浴客は、浴槽の傍なる茶屋の畳の上に上り来れば茶屋の女は甲斐甲斐々々しくタオルにて全身を拭き、浴衣を上から懸ける。（略）号令の下に、第二組、第三、四、五の各組、入り更り立ち更りて、総て三百人に近き浴客が、尽く第一回の時間湯を済ます頃、客は次第に元気を快復し、柄杓やタオルを携へ、中には此等を茶屋の女に托し、例の家鴨に似たる怪しげの歩行にて、各〻其宿に帰る。

4　大町桂月「草津温泉の二十五日」

坪谷の二年後、一九〇八（明治四一）年の暮れに、詩人・随筆家の大町桂月（一八六九～一九二五）が草津に二五日間にわたって滞在した。時間湯に関しては、やや簡略な記述となっている。そのなかで、「あら可笑し、風呂へはいるに号令かけて、揃つて三分、改正の二分、残つて一分、ちツくり御辛抱、辛抱のしどころで飛び上る」という俗謡があったことは、それだけ時間湯がよく知られていたことの現

れといえよう。

酸性峻烈、強く人の体を刺す。梅毒あるものは、言ふも更なり。無きものとても、浴し居れば、必ず、『たゞれ』を生じ、あらゆる病毒を駆除し去る。（略）『たゞれ』出来ては、微温湯では、却つて疼痛を感す。これに於て、時間湯なるものあり。その数、六七、各、湯長ありて、号令して三分間を限りて入浴せしむ。一同揃つて、板にて湯を揉む間に、運動もすれば、湯気をも呼吸して、げに、一挙両得のみにあらず。その時間湯の熱度、百二十二三度より百二十五度に及ぶ。『あら可笑し、風呂へはいるに号令かけて、揃つて三分、改正の二分、残つて一分、ちツくり御辛抱、辛抱のしどころで飛び上る』と云へる俗謡は、よく簡単に時間湯の有様を説明せるもの也。時間湯の外、総湯もあり、内湯もあり、湯瀧もあり。温泉の性質の強烈なるのみならず、涌出の量の多きこと、実に天下無比也。

5　平井晩村「草津紀行」

詩人・小説家の平井晩村（一八八四～一九一九）は一九一八（大正七）年六月に三泊五日で草津に出かけた。その旅の感想を「草津紀行」にまとめた。望雲館に泊まった平井は近くの松の湯を見学している。民謡に造詣が深いだけに湯もみのときの唄に関心をよせ「草津よいとこ里への土産　袖に湯花の香が残る　草津よいとこ白根の雪に暑さ知らずの風が吹く」という歌詞を書きとめている。これが草津節の原形といわれている。

松の湯も時間湯の入浴法に違いはないが、湯の温度を寒暖計で測っており、一回目・二回目で男女を分けている。

朝湯の濡手拭を欄干にかけると、カラン〳〵と鈴が鳴る。チヨン〳〵と拍子木を叩く音がする。

『時間湯の相図で御座いますよ』

女中の話に嗾られて、早速宿の傘をさして手近な松の湯へ見物に出かけた。（略）

松の湯の脱衣場は、近所の温泉宿から集まつて来る老若男女の浴客で一ぱいになつた。約七八十はあらう。――時間湯即はち共同浴場は、この外にも熱の湯、白旗の湯、鷲の湯、千代の湯、地蔵の湯の六ヶ所にあつて、一日に五回、鈴や拍子木の相図で集つて来て浴するのだが、その方法が草津特有のものと聞いて居るだけに、興味が深かつた。

商人、官吏、お百姓、隠居、千差万別な男達が、お早う〳〵と顔馴染の心易げに挨拶しながら裸になつて、各自持参の筒袖襦袢を着てタオルを腰に捲つけて大きな浴槽の周囲に並んで板（巾さ一尺長さ六尺位のもの）を持つて湯揉みを始める。板の先を浴槽に入れて手許の一端を器用に両掌で操つりながら、身振り足拍子面白可笑しく拍子を揃へて、ドツコイ〳〵と湯を揉むのである。其の光景が如何にも呑気で楽しそうである。声自慢の客が

『三浦三崎でヨ――』

と船唄で音頭をとると、他の面々もこれに和して唄ひながら『コリヤ、ドツコイ〳〵』と約三十分ほど揉み続ける。湯長と称する世話人が寒暖計を入れて温度を図つて宜からうとなると、一同は赤裸々になつて眩惑せぬように檜杓でざぶ〳〵頭に湯をかけてから足袋を穿（は）いて号令を待つて居ると、湯長は三つに仕切られた浴槽の温度をみてから、両手を腰に反身になつて、背後の柱時計を尻目にかけつゝ

『宜しくば、そろ〳〵下（さが）りませう』

と極めて静かに、落つき払つて号令する。一同はオーイと一斉に元気らしく怒鳴りながら浴槽に沈みかけるが、何しろ百二三十度以上、の熱湯、眉を顰めて眼をつぶるもの、唇を噛んで唸くも

の、そろり〳〵と肩まで沈むと、誰あつて私語するもの莫い。

『揃つて三分』

『オーイ』

湯長は柱時計と浴槽を見比べながら、語尾を長く引いて号令する

『改正の二分』

『オーイ』

皮膚を焼き爛らかすやうな熱湯のなかで、下腹に力を入れて辛棒する浴客は、分秒の息を刻みながらも、単独に浴槽から出る事は禁じられて居る。之れが時間湯の法則である。若し一人でも不覚なものがあつて、半途で飛上りでもすれば、熱湯が波爛して同槽者の肌を侵すから、一旦湯長の号令のもとに沈んだ以上、三分間は是が否でも忍ばねばならぬのである。

『限つて、一分』

『オーイ』

『ちつくり御辛棒』

『オーイ』

『辛棒の仕どころ』

『オーイ』

『宜しくば上りませう』

応とばかりに飛出したゆで章魚（たこ）のやうな浴客は、爛れた個所の手当をして急いで温泉宿へ戻つて行く。――その後で、女の客が同じやうに湯長の号令で三分間浴槽に沈むのである。

6　若山牧水「上州草津」

一九二〇（大正九年）年五月、歌人の若山牧水（一八八五～一九二八）が草津を訪れた。川原湯温泉から五月二〇日に徒歩で草津に向かい、一井旅館に宿泊、翌日の早朝に渋温泉へ出発した。一井旅館の前に熱の湯があり、そこの時間湯を見学している。

草津の時間湯を噂に聞いていた若山牧水は、ガラス戸の破れから中を覗き込んでいて、湯もみでは攪拌の調子が一糸乱れず、唄と囃子をあわせて真剣に攪拌しているさまを描いている。かぶり湯については言及がなく、三分間の入浴のあいだの隊長の号令を記している。

一杯飲みながら縁さきの欄干の陰にまだ充分さきかねてゐる桜の蕾をぼんやり眺めてゐると、突然一種異様なひゞきの起るのを聞いた。（略）それは私の室のツイ前面に建つて、多角形をしたペンキ塗の建物の中から起つてゐるのだ。その建物は疑ひもなく浴場である。さう思ふと私は直ぐ感づいた、噂に聞いてゐた草津の時間湯の浴場が其処で、あの笛はその合図に相違ないと。（略）

案のごとくその異様な響きの止むか止まぬかに何処からともなく二人三人、五人六人づゝ怪しい風態をした浴客が現れてそのペンキ塗の家にぞろ〳〵集つて来始めた。まことにそれは何といふ不思議な、滑稽な、みじめな姿であることぞ。普通にちやんとした足どりをとつて歩いてゐる人とては殆んど一人もない。（略）すべて湯の強さにあてられて皮膚の糜爛を起してゐる人たちであるのだ。男あり、女あり、皆褞袍（どてら）姿で、それ〴〵に柄杓を持ちタオルを提げ、中には大きな声で唄か何かをどなりながら、えつちらおつちらやつて来るのである。やがて浴場内では拍子木の鳴る音がした。

私は大急ぎで飯をすまして其処に出かけて行つた。そして恐々ガラス戸の破れから中を窺き込んだ。三四十人の者が裸体になり、手に〳〵一枚の板――幅一尺長さ一間ほど――を持つて浴槽内を掻き回してゐるのである。初めはさうでもなかつたが暫く見てゐるうちにその攪拌の調子に一糸乱れぬ規律が出来て、三四十本動いてゐる板の呼吸が自らぴたりぴたりと合つてゐるのに気がついた。（略）そのうちにとある一人が声を張つて或る節の唄を唄ひ出した。する

と一同これに応じて、『ハ、ドツコイ〳〵、ヨイシヨヨイシヨ』と囃すのだ。一人が終れば、それを受けてまた他の一人が唄ふ。すべてみな同じ節なのだ。唄ふ者も、囃す者も、みな呼吸追つた真剣な声である。（略）

私は一心にそれらを見詰めてゐるうちに自づと瞼の熱くなるのを感じて来た。（略）見たところ、さして眼に立つ病人風の者はゐない、が、斯うした荒行の入浴法がどうしても人に或る真剣さを覚えさせずにはおかぬらしい。それが相寄つて一種の鬼気を成してゐるのである。草津といふと梅毒を連想する位だけれど、その患者ばかりがさして多いといふのでは無いさうだ。

再び拍子木が響くと一同ぴたりと板を止めて、やがて隊長といふのゝ命令に従つて極めて静粛にいま攪きたてた湯の中に浸るのだ。そんなに攪き回した後でも、湯は尚ほ百二十度から三十度の熱を持つてゐるといふ。入浴中は絶対に不言不動、誤つて身を動かせば自身のみならず同浴者の皮膚をも傷ふものださうだ。さうした心身不動の入浴時間は三分間に限られてあるのである。

その三分には湯揉みの時とまた異つた厳粛さがある。静まり返へつたなかに、時々たゞ隊長の号令が響く。それ〴〵意味ある言葉なのだか、我等には唯だ『ウオー、ウオーン』『ウオーン』といふ風にしか聞えない。（略）試みにその隊長の号令をその順序に書いて見ると、

『宜しくばそろ〳〵下りませう。』
『揃つて三分。』
『改正に二分。』
『限つて一分。』
『ちつくり御辛抱』
『辛抱のしどころ。』
『サツ宜しくば上りませう。』

即ちこれだけで終るのださうだ。

7　若山牧水『みなかみ紀行』

若山牧水は一九二二（大正一一）年一〇月にも、軽井沢から草津軽便鉄道を利用し、孀恋から自動車で草津に向かい一泊している。同じ一井旅館に宿泊し、知人を誘って時間湯をみている。

湯もみ三十分、かぶり湯百杯、三十秒ごとに湯長が号令を掛けていること、時間湯は六箇所で一日四回行われていると記している。

中には三四十人の浴客がすべて裸体になり幅一尺長さ一間ほどの板をもつて大きな湯槽の四方をとり囲みながら調子を合わせて一心に湯を揉んでゐるのである。そして例の湯揉の唄を唄ふ。先づ一人が唄ひ、唄ひ終ればすべて声を合せて唄ふ。唄は多く猥雑なものであるが、しかもうたふ声は真剣である。全身汗にまみれ、自分の揉む板の先の湯の泡に見入りながら、声を絞つてうたひ続けるのである。

時間湯の温度はほゞ沸騰点に近いものであるさうだ。そのために入浴に先立つて約三十分間揉みに揉んで湯を柔らげる。柔らげ終つたと見れば、各浴場ごとに一つづゝついてゐる隊長がそれと見て号令を下す。汗みどろになつた浴客は漸く板を置いて、やがて暫くの間、各自柄杓を取つて頭に湯を注ぐ、百杯もかぶつた頃、隊長の号令で初めて湯の中へ全身を浸すのである。湯槽には幾つかの列に厚い板が並べてあり、人はとり〴〵にその板にしがみ附きながら隊長の立つ方向に面して息を殺して浸るのである。三十秒が経つ。隊長が一種気合をかける心持で或る言葉を発する。衆みなこれに応じて『オゝウ』と答へるといふより唸るのである。三十秒ごとにこれを繰返し、かつきり三分間にして号令のもとに一斉に湯から出るのである。その三分間は、僅かに口にそ

の返事を称ふるほか、手足一つ動かす事を禁じている。動かせばその波動から熱湯が近所の人の皮膚を刺すがためであるといふ。

この時間湯に入ること二三日にして腋の下や股のあたりの皮膚が爛れて来る、やがては歩行も、ひどくなると大小便の自由すら利かぬに到る。（略）

草津にこの時間湯といふのが六箇所に在り、日に四回の時間をきめて、笛を吹く。それにつれて湯揉の音が起り、唄が聞えて来る。

8　加藤特派記者「草津入湯の記」

「草津入湯の記」は『朝日新聞』一九二六年七月七日と八日に掲載された記事で「暑熱を超えて」という連載の八回・九回にあたる。

記者は五つある時間湯の中から熱の湯を選んで体験している。湯長は湯本米蔵で、過去十八年の間一日も休まず、入湯の音頭取りをやり続けてきたと紹介されている。

両側にズラリ並んだ亡者連が湯板両手にろをこぐ様にカツタン〳〵かき回しはじめると、たれの間からともなくわきだすやうな湯もみうた――

「草津よいとこ、一度はおいで　お花の中にも花がさく……オヤ、ドツコイ〳〵」

一人が歌うとみんなで「オヤ、ドツコイ〳〵」とコーラスをやる。膝や腕の関節ばかり寒竹のふしのやうに太い男、赤ン坊の様な脚の老人、青くやせた若者などが、汗にあえぎながら湯もみを続ける。

「熱さ白根の山から見れば……オヤ、ドツコイ〳〵」この歌の調子は妙に男性的で、然も哀調を帯びてゐる。

かうしてもみぬくことやゝ小半時、湯の中へ湯長が寒暖計を差しいれる。一番湯百二十六度。拍子木がカチリ、湯もみがとまる。亡者等は一せいにひしやくで湯を頭にざぶざぶとかぶる。（略）

「よろしくばソロ〳〵下りませう」湯長の文句が謡（うたひ）じみてゐる。まづ皆んなが足の先端をソーとひたす。「アツツーツ……」胴ぶるひ。湯の表面がかすかに震ふ。そろり〳〵といれてゆく。熱湯がかみつく。（略）全身がうなる。末せう神経なんかもうとつくに逃げだしてしまつた。足と手の先がこゞえついたやうにしびれてくる。（略）

湯長が仁王様の様な面構へで見下ろしていふ――「そろつて三分！」すると亡者一同哀求の声で「オーイ」と応へる。足の裏が焼ける。「改正二分――限つて一分」「オーイ」――号令が進むと共にうめきが舌先から下腹へと下降する。「ちつくり御辛抱」「オーイ」「辛抱のしどころ」「オーイ」――この最後のオーイは文字通り虫の声だから我ながら情けない。

湯長が「サツ、よろしくば上りませう」といふので飛び上がる。僅三分間の虐政にさいなまれ、紅がらを一面に塗つたやうに赤くなつた身体には窓から吹きこむ風がもつたいない程心地よい。

9　エシマ・ハツキ「草津漫写」

「草津漫写」は、旅行雑誌『旅』一九三五年七月号に掲載されたイラスト入りの記事である。『旅』には、江島ハツキの筆名で一九三三～三四年に六本の記事がみえる。

この文では、入浴時間を「この間、約五分」としており、「揃って三分」という号令の前に、全員が肩まで沈む時間を含んでいるのかもしれない。また、入浴者は「上がりましょう」の合図の前にみな湯から出ている。松の湯を図解したイラストを掲載しているので、松の湯の描写と思われ、ここでは規律がゆるくなったことがあったのかもしれない。

午前六時、十一時、午後三時、七時、この四回に渉つてラツパが鳴響きます。招集の合図です。時間湯です。湯長の指揮に従つての名高い湯もみ。

一番湯が百十八度、二番湯が百十六度、三番湯が百十四度、之を皆々列をなしてモミます。声自慢が塩カラ声で温度をとります。と一斉に外の者が後をつゞけます。同時にモミ板のフチを交互に湯船のフチを交互に湯船のフチに打つけてトンツ――トンツと拍子をとります。（略）

湯長が湯に指をつツこんで熱さをみます。OKとなると号令一下。ズラリズラリと腰かけ板を渡して目白押しに並びます。唄うやうな号令、次第に肩迄沈んでゆきます。

カチ〳〵と時計が秒をキザミます。と亦唄ふ号令、

「イマ　シバラク　ノ　ゴシンボ――」

とたんにドカ〳〵とあがつて了ふのです。この間、約五分。

10　吉田団輔「草津温泉」

吉田団輔は鉄道省旅客課の職員で、これは著書『季節の旅　山・海・温泉』の一節である。この旅の経験は渋川と草津を結ぶ省営バス開通直前の一九三五年と推察される。

時間湯を行っている人びとの姿を描きつつ、草津節や草津小唄に合せて湯をもむ人達の手振りや足拍子をみることが、旅の土産となり、昔ながらの湯治気分が滲み出ているとある。

温泉は頗る強烈で、昔から湯ただれに聞えてゐるが、旅館で一回三分間の入浴を一日二回に止めてをけば決してその心配はない。よしんば何等かの身に覚えがあつてもである。尤も街頭では股間に湯たゞれをつくつて、がに股に歩く不格好な姿を見ることは珍らしくないが、それはさういふ湯治法に従つてゐる人達の姿で、何も不気味に思ふことはない。熱の湯その他五ヶ所の時間湯で、一日四回行つてゐる入湯振りを見るのも、草津の旅のよい土産である。草津節や草津小唄に合せて湯をもむ人達の手振りや足拍子も面白く、湯長の号令で湯に入る様も昔ながらの湯治気分が滲み出てゐる。

四　時間湯の変遷

これまで取り上げた資料にもとづき、時間湯の変遷に関して、摘要を**表3**にまとめた。

一八六九年に草津に滞在した石坂白亥によれば、湯に入るときには腹や手足に布を着けていたこと、高温の湯が動かないように集団で沈んだり上がったりしていたこと、練兵の指揮をまねて「総隊あがれ」という指図をする者がいたことがわかる。しかし、入浴時間の記録はなく、かぶり湯、湯もみへの言及はない。

一八七八年には、のちに熱の湯の管理人となる野島小八郎が草津に来ている。その翌年に訪れた大槻文彦の紀行文によれば、熱の湯に特別な入浴法があるとして、湯もみ一〇分ほど、かぶり湯三〇〇杯ほどを行い、五一・七度という高温の湯に「凡二三分間許」入浴していたことがわかる。隊長と呼ばれる者は今年より人を選んで世話人と称していること、糜爛でよろよろと歩く入浴客のさま、隊長は一番熱い湯の差し口のところに入浴していること、弱い者や新参者は布をまとって入ること、隊長のかけ声にみなが唱和する様子などが記されている。

長井文靖の案内書（一八八四年）には、鷲の湯・地蔵の湯の入浴法は熱の湯とほぼ同じとあり、三箇所となっている。隊長は最も熱い一番湯に入っていたこと、土俗で「湯を揉む」「湯を冠る」と言っていたこと、足袋や木綿で身体を被っていたこと、「揃て三分」「改正の二分」、「限つて一分」という号令が使われており、時間を厳密に管理していたことがわかる。湯の温度は験温器がないため明らかではない

表 3　各種資料にみる時間湯の変遷

来訪年／刊行年		箇所	回数	摘　　要	文　　献
明治 2 年	1869			「総隊あがれ」の合図，数度の入湯，足袋・白布を着用	石橋白亥「白根紀行」
明治 8 年頃	1875?			桂燕玉，隊長と呼ばれる	中村舜二『天下の草津温泉』
明治11年	1878			野島小八郎，草津来訪	中村舜二『天下の草津温泉』
明治12年	1879	1	5-6	湯もみ10分，51.7℃，かぶり湯300杯，隊長も入湯，2−3分，かけ声に唱和	大槻文彦「上毛温泉遊記」
明治17年	1884	3	4-6	湯もみ数分時，60.0−54.4℃，かぶり湯100−300杯，足袋・木綿で被う，「揃って3分」の号令	長井文靖『上毛草津鉱泉独案内』
明治20年	1887	3？		草津温泉改良議案に「時間湯」，熱/鷲/地蔵など	山村順次「草津温泉観光発達史」
明治21年	1888			野島小八郎，熱の湯の管理人に	中村舜二『天下の草津温泉』
明治　年	-1896			時間湯の湯もみ・かぶり湯・入浴の図	阿部善吉『上州草津温泉場名所案内』
明治38年	1905	5		時間湯は熱/鷲/地蔵/松/白旗の5箇所	松永彦右衛門『上州草津温泉誌』
明治39年	1906	5	5	湯もみ30分，かぶり湯100−200杯，隊長はかぶり湯で検温，48.9℃，朝5時の1回目は5組	坪谷水哉「草津入浴記」
明治40年	1907	6	4	熱/鷲/地蔵/松/白旗/千代の6箇所，湯もみ30分，温度の低い浴槽に客が多い，隊長野島小八郎	熊田葦城「草津の時間湯」
明治41年	1908	6-7		51.7−50.0℃，湯長の号令が俗謡となる	大町桂月「草津温泉の二十五日」
大正 3 年	1914	5？	4-5	かぶり湯100-200杯，時間湯を行う著名な浴場	戸丸国三郎『草津温泉名勝写真帖』
大正 7 年	1918	6	5	筒袖襦袢で湯もみ30分，足袋をはく，赤裸でかぶり湯	平井晩村「草津紀行」
大正 9 年	1920			一糸乱れぬ湯もみの規律，54.4−48.9℃，隊長の号令	若山牧水「上州草津」
大正11年	1922	6	4	湯もみ30分，かぶり湯100杯	若山牧水『みなかみ紀行』
大正11年	1922	6	5	湯もみ62.8→48.9℃，かぶり湯20-50杯，足袋をはく	五十嵐治夫『風光明美草津温泉誌』
大正12年	1923	5		熱/鷲/地蔵/松/千代の5箇所	布施廣雄『草津温泉案内』
大正15年	1926	5		湯もみ30分，寒暖計，一番湯52.2℃，湯長湯本米蔵，「草津よいとこ」の歌詞	加藤特派員記者「草津入湯の記」
昭和10年	1935		4	号令前に湯から上がってしまう，47.8−45.6℃	エシマ・ハツキ「草津漫写」
昭和10年	1935	5	4	時間湯の見学は旅の土産，昔ながらの湯治気分	吉田団輔「草津温泉」
昭和13年	1938	5	4	三番湯の浴槽が大部分，湯もみ第1回60分，第2回以降30-40分，寒暖計，48.9−46.1℃　かぶり湯30杯	中村舜二『天下の草津温泉』

湯の温度は摂氏に換算した

が、一番湯で六〇度から五四・四度としており、高い値を記している。

「時間湯」という名称は、一八八七年の草津温泉改良議案の条文で確認できる。

松永彦右衛門の案内書（一九〇五年）では、多年経験ある湯長の監督のもとで、五箇所の時間湯があるとしており、白旗の湯と松の湯が加わっている。

一九〇六年に草津に滞在した坪谷水哉の紀行文には、湯もみは三〇分ほどで、隊長はかぶり湯で温度を確かめており、かぶり湯は一〇〇～二〇〇杯、入浴に関する七度の号令も記されている。隊長は正面の時計の下で号令しており、自らは入浴していないと思われる。

熊田蘆城による一九〇七年の記事では、千代の湯を加えて時間湯は六箇所となっている。すべて号令も調子も同じで、隊長の命令で軍隊的行動をとるという。熱の湯の第一槽の湯温は六〇度もあり、湯もみで五〇度になり湯も和らぐが、入浴客が最も多いのは温度の低い第三槽であると記している。また、四～五本目になると四三・三度に下がり、婦人は最後に入浴するとある。

図4に共同浴場の位置を示した。湯畑の周りに、熱の湯・白旗の湯・松の湯があり、やや離れた場所に、千代の湯・鷲の湯・地蔵の湯がある。熱の湯は大きく、時間湯を行う浴槽以外に、温度の低い浴槽があった。

この後、湯もみが三〇分ほど、かぶり湯一〇〇

図4　共同浴場の位置（明治43/1910年）
（「吾妻郡草津町郷土誌」付図より作成）

～二〇〇杯、号令に従い三分の入浴という定型がしばらく続く。平井晩村や若山牧水は湯もみの時の唄に関心を寄せていた。

変化が現れるのは、一九二〇年代である。

五十嵐治夫の案内書（一九二二年）では、時間湯は六箇所で行なわれている。最も熱い第一槽の湯の温度が四八・九度前後に下がると、かぶり湯の号令をかける、その回数は減って、医学上・浴客統計上害あるため、現今は二十杯から五十杯位を通常とするとある。また、足袋は必ず突っ掛けると記している。

時間湯を行う浴場は、同じ一九二二年に刊行された萩原太一郎『草津温泉』増補五版でも六箇所と記しているが、一九二三年の『草津温泉案内』では、白旗の湯がはずれて、五箇所となった。以後の文献でも五箇所と記されているので、この間に変更されたといえる。一日の回数は、四回から六回とばらつきがあるが、一九三〇年代には四回となっている。

西川（一九三七：九六）は、時間湯について「大正の終頃から、医師布施廣雄氏は湯長と相談の上、一番湯四十八度、二番湯四十五度、三番湯四十二度と規定し、一日四回（午前六時、十一時、午後二時、五時）の入浴とした」と述べており、これを契機に変化が促されたと考えられる。

中村舜二の案内書（一九三八年）には、時間湯の浴場は普通湯に比べて収容力が大きい、温度の低い三番湯の利用が多く、この浴槽が大部分を占めているとある。三番湯の温度は、一番湯より五度低い華氏一一五度とすれば、摂氏四六・一度となり、かつての値よりも低い。大半の入浴客はこの程度か、それよりも低い温度で時間湯を行っていたことがわかる。湯もみは、新鮮な湯の朝一回目には六〇分、二回目以降三～四〇分、かぶり湯は三十回程度が合理的となっている。また、威勢よく湯もみを行う様子も描いている。

五十嵐や中村は自身が草津に滞在し、温泉の効能を評価して、時間湯を積極的に紹介している。それに対して、草津関係者の案内書では、時間湯については簡略な記述が目立つ。これらは、一般湯の入浴客を対象にしていたためと考えられる。布施廣雄の案内書（一九三七年）では、一般的な入浴法やただれの成因・予防・手当などが詳述されている。入浴者心得には、到着当初には低温度で一日一～二回の入浴に留めること、入浴時間は毎回二～三分とすること、入浴の最適温度は摂氏四二～三度などと記している（布施一九三七：三〇―三二）。本書にはスキーの案内もあり、伝統的な湯治客だけでなく、消費額の大きい保養・遊覧客へと客層を広げていく意図があったのであろう。

寺内大吉（一九二一～二〇〇八）は「湯もみ」で知る草津の魅力」（『旅』一九六九年一一月号）で次のように述べている。

皮肉にも暗い、病毒者のイメージをふんだんに盛りこんだ「草津よいとこ」のメロディが日本全土をおおうたのはベルツ博士が

帰国してからしばらくあとである。大正七、八年ごろからだと言われる。

文化年間の温泉大関は、ついに大正、昭和の現代の三流力士になりさがってしまった。昔ながらの瘡毒の地、お医者さまでも草津の湯でも惚れた病いは……と全く古いイメージに惚れぬいてしまった愚者たちの愚行のために、その病を治すことができなかったのである。

この記事にあるように一九七〇年代に高原地区の開発が進むまでは、草津は病人専用というイメージが残っていた。一九三〇年代にも観光地としての草津を強調する動きがあったので（関戸二〇一八b）、草津関係者の案内書もそのような流れを汲んでいて、時間湯への言及が少なかったと考えられる。

［参考文献］

五十嵐治夫（一九二二）『風光明美草津温泉誌』東京鉄道タイムス社

石井　裕（二〇一七）「香川敬三と明治の水戸藩士―武田金次郎らの知られざる末期―」常陸大宮市史研究一、四一～四八頁

石坂白亥・小山　宏解読編著（一九八〇）「白根紀行」『安政北紀行』渋川市有馬郷土館、五七～九一頁

エシマ・ハツキ（一九三五）「草津漫写」旅一九三五年七月号、一一八～一一九頁

ＮＰＯ法人草津湯治の会（二〇一四）『湯ノ言　時間湯の伝統と現在Ⅱ』銀河書籍

大槻文彦（一九三八）「上毛温泉遊記」『復軒旅日記』冨山房、二～三二頁

大町桂月（一九〇九）「草津温泉の二十五日」『関東の山水』博文館、三四二～三五一頁

関戸明子（二〇一二）「鳥瞰図にみる近代―草津温泉を事例として―」歴史地理学五四―一、三九～五三頁

関戸明子（二〇一八ａ）「紀行文に描かれた近代の草津温泉」群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）六七、六一～七六頁

関戸明子（二〇一八ｂ）『草津温泉の社会史』青弓社

坪谷水哉（一九一一）「草津入浴記」『山水行脚』博文館、六七～七六頁

寺内大吉（一九六九）の「「湯もみ」で知る草津の魅力　病人専用のイメージから脱皮する日本最大の酸性泉」旅一九六九年一一月号、九六～一〇二頁

戸丸国三郎（一九一四）『草津温泉名勝写真帖』日本温泉協会代理部

長井文靖（一八八四）『上毛草津鉱泉独案内』長井文靖

中村舜二（一九三八）『天下の草津温泉』大東京社

西川義方（一九三二）『温泉と健康』南山堂書店

西川義方（一九三七）『温泉須知』診断と治療社出版部

萩原太一郎（一九〇八）『草津温泉』草津鉱泉取締所

萩原太一郎（一九二二）『草津温泉』増補五版、草津鉱泉取締所

萩原太一郎（一九二六）『草津温泉』増補六版、草津鉱泉取締所

平井晩村（一九一八）「草津紀行」『湯けむり』武俠世界社、一～七八頁

布施廣雄（一九二三）『草津温泉案内』草津鉱泉取締所

布施廣雄（一九三七）『くさ津』草津温泉組合

松永彦右衛門（一九〇五）『上州草津温泉誌』松永彦右衛門

山村順次（一九九二）「草津温泉観光発達史」、草津町誌編さん委員会『草津温泉誌　第弐巻』草津町役場、五～五五四頁

吉田団輔（一九三七）「草津温泉」『季節の旅　山・海・温泉』新日本社、一六一～一六四頁

若山牧水（一九二一）「上州草津」『静かなる旅を行きつゝ』アルス、一三一～一四四頁

若山牧水（一九三〇）「みなかみ紀行」『牧水全集　第四巻』改造社、五七二～六三八頁

[注]

(1) 共同浴場の変遷については、関戸（二〇一八b：三六―四二）を参照。

(2) 時間湯の浴槽のほかに温度の低い番外湯が設けられていた。水を混ぜずに温度を下げるため、四～五日に一度、湯を替えるだけなので、不潔であったという。

現在の「熱乃湯」では、湯もみショーが行われ、観客も湯もみ体験ができる。これは一九六〇年に始まった。ただし、その萌芽は昭和初期の中村（一九三八：一三八―一三九）の次のような記述にうかがえる。

湯もみを経験したくとも、私は時間湯ではなく温度の低い番外湯に入っていたので、湯もみ作業はなく、ちょっと手が出なかった。丑の湯祭りの夜、時間湯の内外は湯治客と見物人とで、すし詰めの盛況で、当夜の湯もみは活気があり、見物席の一隅に小さくなっていた私も、勢いにつられてフラフラと前に出て、湯もみをやってみた。しかし、調子がはずれ、勝手が違い、ものの十分と経たないうちに退却したという。

(3) 武田金次郎（一八四八～九五）は、天狗党首領の武田耕雲斎の孫で、諸生党への粛正を行い、一八六九（明治二）年七月に水戸藩の権大参事となった。一八七一年に免官。石井（二〇一八）を参照。

（令和元年九月二十五日受理）